

“しりとり絵本”から広がる面白さ

— 石津ちひろ作品を中心に —

池田邦子

On the *Shiritori* (Japanese Word-chain Game) Picture Books of Chihiro Ishizu
Kuniko Ikeda

I. はじめに — 本稿の課題

子どもがする「ことば遊び」の中で、「しりとり」は、いろいろな言葉の持つ音の仕組みを理解するために欠かせない遊びの1つである¹。この遊びは、幼稚園や保育所などの保育現場において、友だちと共に楽しむことを通じ、子ども一人ひとりの語彙数を増やしたり、言葉に対する認識を深めたりする活動としてしばしば行われている²。

こうした「しりとり」を保育の中へと取り入れる際の導入に活用される絵本として、馬場のぼる『ぶたたぬききつねねこ』（こぐま社、1978年）がある。この絵本は、「しりとり」という遊びのルールを極めて単純な形に表現しているものであり、1978（昭和53）年という早い時点で絵本へ「しりとり」を本格的に取り入れていたこと、同書が「しりとり」そのものの面白さを基盤として著されていることなどは、注目すべき点であった。

そして、馬場によって開拓された“しりとり絵本”というべきジャンルは、彼自身による続編『ぶたたぬききつねねこ その2』、『こぶたたんぼぼけつとんとぼ』（こぐま社、1981年、1990年）を経て、1980年代末以降には、新たなスタイルを見せ始めることとなった。例えば、五味太郎『しりとりぐるぐるカード（全4巻）』（リプロポート、1988年–1989年）とそれを絵本化した『しりとりぐるぐる絵本（全4巻）』（同、1992年）、さとうわきこ『わっこおぼちゃんのしりとりあそび』（童心社、1989年）、斉藤洋・森田みちよ『しりとりこあら』や同『しりとりたぬき』（岩崎書店、1996年）、石津ちひろ・はたこうしろう『しりとりあいうえお』（偕成社、2000年）、石津ちひろ・荒井良二『しりとりあそびえほん』（のら書店、2002年）などは、「しりとり」そのものの面白さだけでなく、「カードゲーム版」や「迷路」、「隠れキャラクターを探すこと」、「だじゃれ」といった別の遊び的要素も取り入れている点が特徴であると考えられる。

本稿では、「ことば遊び」に関する絵本を数多く手がけ、“しりとり絵本”にも新たな可能性を切り拓いた石津ちひろの『しりとりあいうえお』及び『しりとりあそびえほん』という2冊を取り上げ、同書に見られる“しりとり絵本”の面白さを読み解いていく。そして、そうした作業を行うことで、「ことば遊び」の保育教材のあり方を探るための視点を検討してみたい。なお、本稿は、拙稿「“しりとり絵本”の面白さ — 馬場のぼる作品を中心に」の後に続くものである³。

Ⅱ. 石津ちひろと“しりとり絵本”

2冊の“しりとり絵本”を手がけた石津ちひろは、1953（昭和28）年に愛媛県で生まれ、早稲田大学の仏文科を卒業した女性絵本作家・詩人である。荒井良二が絵を担当した『なぞなぞのたび』（フレーベル館、1998年）で、1999（平成11）年にボローニャ児童図書展絵本賞を受けている。回文やなぞなぞなどの「ことば遊び」を題材にした絵本の執筆、「リサとガスパール」シリーズなどの海外絵本の翻訳を数多く手がけており、言葉に対する独得な感覚を発揮した絵本の世界は子どもだけでなく大人も魅せられており、ファンも少なくない絵本作家の1人である。

そうした石津による作品の中でも、「ことば遊び」を扱った絵本は、彼女の“ライフワーク”とも言うべきものであり、『ぞうからかうぞ』や『ころころラッコ コラッコだっこ』（藤枝リュウジ・絵、リポポート、1993年）、『なぞなぞのへや』（高林麻里・絵、フレーベル館、2000年）などの代表作がある。それらは、シュールな文章もあってか、長新太や荒井良二、はたこうしろうら、独得のタッチで作品世界を描く画家とのコンビが多い。また、彼女が絵本で表現する「ことば遊び」は、次のように「日本の絵本史」では評価されており、その仕掛けが新作を発表する度に工夫され、複雑でユーモアあふれる試みが行われていることも注目すべき点の1つである。

「石津ちひろは『ことば』にこだわった絵本の文作家で、なぞなぞやことば遊びをテーマにした作品を書いている。『なぞなぞえほん』（フレーベル館、一九九八年）や、『きっとみずのそばに』（文化出版局、一九九九年）などは言葉だけでなく、荒井良二の絵とともになぞときがで、言葉の世界に広がりを見せている。」⁴

そのような「ことば遊び」を扱った一連の絵本の中で、『しりとりあいうえお』と『しりとりあそびえほん』の2冊は、いずれも2000年代初頭に著されており、「絵」と「文字」のコラボレーションを図るなど、それ以前に手がけた作品の成果が積極的に生かされたものと考えられる。また、そこで試みられている「遊戯性」は、回文やなぞなぞのような高度な技巧が施されたものとは大きく異なり、幼児でも単純に楽しむことができるようなものと見てよいであろう。

Ⅲ. 石津ちひろの“しりとり絵本”を読み解く

（1）絵本を読み解く視点

絵本の研究については、中川素子や竹内オサムらの著作で見られるように、テキストを「文字」と「絵」のコラボレーションとしてとらえる「表現論」の立場から、絵本研究が行われ始めている⁵。特に竹内は、「視点」や「時間」といった切り口で、「文字」と「絵」という2つの表現要素が絡み合う「物語絵本」の構造分析を試みており、そこから学ぶ点は非常に大きい。

以下、本稿では、そうした竹内のひそみに倣って、文字と絵の呼応、各見開きのつながりといった点に着目しながら、石津ちひろによる2冊の“しりとり絵本”の読解を行ってみたい。なお、絵本につい

ては、ページが記載されていないものも多く、本を開いた状態で左右両ページのことを「見開き」と呼ぶため、本発表ではそれに従い、ページ数代わりに「第1見開き、左・右ページ」という表示方法で記述を進めていく⁶。

(2) 第1作『しりとりあいうえお』

2000（平成12）年に出版された『しりとりあいうえお』は、2007（平成19）年2月現在で第9刷を数えている。縦20cm、横18.4cmの大きさで、扉を入れて全48ページ（左開き）からなり、奥付を含めて全24見開きによる構成である。

本書は、「五十音（あいうえお）」の「しりとり」が順番追って、1ページ（見開きの左右各ページ）ないし2ページ（見開き）に1つずつ配置される形で展開していく。それは「だじゃれ」風の文章が連なっていくものであり、その最後の1文字（ひらがな）が次の文章を始める文字（ひらがな）となる。以下、表紙や見返しなども含めて、それぞれの画面で展開されている「しりとり」を見ていきたい。

表表紙（カバーも含む）は、色とりどりの「しりとりあいうえお」という書名の下に、「石津ちひろ ㊦ はた こうしろう ㊧」と著者の名前が配置されている。そして、その下に、右から「あしか」の足、月を刺そうとする「か」、「きりん」、「くま」、「けむしのこ」、「こあら」という6匹の生き物が楽しそうに並んで歩く姿を描いている。それらの並び方は、一見「しりとり」にはなっていない。しかし、それぞれの頭の1文字を拾えば、「かきくけこ」という「か行」が現れる。そうした表紙全体の雰囲気は明るく、この絵本に対する期待を持たせるような印象がある。

前見返しは、右ページから左ページにかけて、「五十音」が縦書きで書かれている。右ページには「あ行」から「な行」まで、左ページは「は行」から「わ行」まで配置されている。本文で展開される「五十音のしりとり」への期待を持たせると同時に、読み終わった後で、もう一度それを振り返る素材になっていると考えられる。

扉は、書名である「しりとりあいうえお」の下に、「石津ちひろ ㊦ はた こうしろう ㊧」と著者の名前を置いている。その「あいうえお」は動物の姿をかたどっており、「あ」が「あらいぐま」、「い」が「いたち」、「う」は「うま」のように描かれたものである。それらの右下に「きみはさいごまでいえるかな」という看板を持ったくまが置かれている。これは、カバーの前袖に書かれた「あさからはじまる しりとり の ぶんに / いきいきした さしえがついて / うれしさ いっぱいの / えほんになりました。 / おおきな こえで よんでください。」（太字原文、以下同様）というメッセージとも呼応しており、読者に「しりとりあいうえお」の遊びを声に出して楽しんで欲しいと求めているものである。

第1見開きの左ページから第3見開きの左ページが「あ行」となっている。「あつひ あしかと あそびたい」、「いのししいつでも いそがしそう」という具合に、「あ」で始まる単語を重ねただじゃれの後、「あそびたい」の最後にある「い」が、次のページの「い」から始まるだじゃれ風のしりとりへと繋がっていく⁷。こうした音節の連関が、「五十音」の順番に重ねられるのである。また、ページの上部に横書きで書かれた「文字」と下に配置された「絵」の関係は、「文字」で書かれたユーモア（あるいはシュール）な世界を「絵」が示すものとなっており、まだ「文字」が十分に理解できない子どもたちにも、「しりとりあいうえお」の遊びを楽しめるように配慮がなされている。「あ」で言えば、「あつひ

を太陽が、「あしか」がネズミを曲芸の玉のように扱って遊んでいる様子が描かれているというわけである。

第3見開きの左ページが「お」で終わり、その右ページから「か行」が始まる。その後、第4見開きの「き」と「く」を経て、第5見開きの「け」と「こ」へ続く。「か行」は表表紙（カバー）に描かれていた生き物たちがそのまま登場し、そこの連関が図られている。また、「け」と「こ」では、「ケーキ」及び「コアラ」というカタカナに、ひらがなでふりがなが振られている。

第6見開きの左ページから第3見開きの左ページが「さ行」となっている。これは、「か行」と同様に、裏表紙と同じ生き物が描かれてきちんと連関がなされている。

以下、第8見開きの右ページから「た行」となっている。その後、第10見開きの右ページまで続く。また、第11見開きの左ページから第13見開きの左ページまで「な行」となっている。「ぬ」で登場する動物は「ヌー」であるため、いままで比較的身近に見聞きする生き物で来ていた「しりとりあいうえお」の調子が少し崩れる形となった。

第13見開きの右ページから「は行」が始まり、第16見開きの左ページ「ほ」となっている。「ひ」は第14面の両ページを費やしており、「ひばりがひそひそひみつのせりふ」が左ページの上部に置かれ、その下に「し」で登場した「しろくま」に「ひばり」が耳打ちする様子、右ページ奥には彼からラブレターを受け取った「しろくま」の彼女が描かれているものである。

第16見開きの右ページ「ま」から第18見開きの右ページの「も」となっている。また、第19見開きの左ページから第20見開きの全ページが「や行」となっている。「よ」も、「ひ」と同じく第20面の両ページを使い、左ページ上部に「よたかがよろこぶよるのそら」の文章が配置され、右ページ中央に夜空を飛ぶ「よたか」が描かれているものである。

第21見開きの左ページから第23見開きの左ページが「ら行」となっている。第23見開きの右ページから「わ行」となり、次のページ、第24見開きの左ページにある「ん？」でおしまいである。「ん」で終わることは、「五十音」としては当然ではある。しかし、「ん？ あ…」などのように最初の「あ」へ戻る仕掛けを施せば、馬場のぼるの“しりとり絵本”に見られた「ことばの円環的面白さ（リエゾン）」を醸し出すことができ、最初から「もっかい読んで」という面白さが生まれたのかもしれない⁸。なお、続く第24見開きの右ページは奥付になっており、本文はない。

後見返しは、右ページから左ページにかけて、「濁音」と「半濁音」の使い方が表の形で示されている。右ページにはまず「°」と「°」を置いて、その左に「が行」と「ざ行」が、左ページは「だ行」と「ば行」、「ぱ行」がそれぞれ配置されている。これらは、前見返しの「五十音」に続いて「濁音」と「半濁音」を教える形である。

裏表紙（カバーも含む）は、表表紙に描かれていた「こあら」に並ぶように右から左へ「さる」、「しろくま」、「すかんく」、「せいうち」という順で配置されている。表表紙は背景が白だったが、裏表紙はオレンジの背景になっている。動物名に着目すると、表表紙に続く形で「さしすせ（そ）」という「さ行」が現れてくる。動物たちの歩く地面は、裏表紙から表表紙へと延びており、そこには「五十音」の「あ」から「を」までのすべてが互い違いにブロック状で書かれている。裏表紙に描かれた動物たちも笑顔で、全体に明るい印象を与えている。

(3) 第2作『しりとりあそびえほん』

第1作から2年を経て2002(平成14)年に出版された『しりとりあそびえほん』は、2006(平成18)年12月現在で第12刷を数えている。前作とは異なり、縦17cm、横16cmの大きさへと縮められた判型で、扉と奥付を入れて全24ページ(右開き)からなり、全11見開きによる構成を取るものである。

本書で扱われている「しりとり」は、次のような全4部にわけてとらえることができる。第1部は“大小のしりとり”であり、「おおきくなるしりとり」と「ちいさくなるしりとり」という2つからなる(第1見開き～第2見開き)。また、第2部は“四季のしりとり”で、「はるのしりとり」と「なつのしりとり」、「あきのしりとり」、「ふゆのしりとり」という4つが展開されている(第3見開き～第6見開き)。さらに、第3部は“色のしりとり”であり、「あかのしりとり」と「しろのしりとり」、「みどりのしりとり」、「きいろのしりとり」の4つからなる(第7見開き～第10見開き)。最後の第4部は“全員集合”と呼ぶべきセクションで、これまでの「しりとり」で登場したもの(キャラクター)が画面に並んでいる(第11見開き)。以下、表紙や見返しなども含めて、それぞれの画面で展開されている「しりとり」を見ていこう。

表表紙(カバーも含む)は、カラフルな色使いの「しりとりあそびえほん」という書名が全面に記され、その中央に、「石津ちひろ(文) 荒井良二(絵)」と著者たちの名前が配置されている。画面いっぱいにかわいい動物の絵やリボンなどが文字の周りにちりばめられていた。また、「しりとりえほん」のそれぞれの文字に目もつけられている。さらに、カバーの袖には「しりとり」という文字とその絵(しり鳥)が描かれていることも面白い。そうした表紙全体の雰囲気は非常に明るく、この絵本に対する期待が高まるような印象を与えるものである。

前見返しは、全面がオレンジ色で、左右ページに5個ずつ全10個の白抜きのシルエットが円状で描かれ、各シルエットの間には相互に向けた矢印も入れられている。このシルエットと矢印は、これから本書の中で展開される「しりとりあそび」への期待を高めるものであると言えよう。

扉は、笑顔の月と星が描かれており、そこに「石津ちひろ(文) 荒井良二(絵)」と著者たちの名前が配置されている。それらの丸い形は、前見返しにあった円状の絵柄を受けると同時に、次のページの絵に登場する黄色い太陽へと転換していく要素を含んだものである。

第1見開きと第2見開きは“大小のしりとり”を形成している。第1見開きは「おおきくなるしりとり」で、「文字」は「のみ」と「みのむし」、「しょうりょうばった」、「たこ」、「こあら」、「らっこ」、「こぶら」、「らば」、「ばく」、「くじら」という動物名による「しりとり」がなされているものである。その「絵」は、「くじら」の上に描く動物が左から右へと配置され、体格がだんだん大きくなる姿が示されている。第2見開きは「ちいさくなるしりとり」であり、第1見開きと同じく「ぞう」と「うし」、「しまうま」、「まんとはひひ」、「ひょう」、「うみへび」、「びーばー」、「あひる」、「るりたては」、「はえ」という動物名の「しりとり」が行われている。その「絵」も文字に対応する形で、体格が左から右へとだんだん小さくなるように配置されている。いずれの見開きの画面構成も、10個の「文字」を並べ、「大小」という概念を「絵」で非常にわかりやすく示しているものと言えるであろう。しかし、残念ながら、この2つの見開きの「しりとり」は続いておらず、それら相互の連関という面白さを見ることはできない。

第3見開きから第6見開きまでは、“四季のしりとり”である。第3見開きは、「はるのしりとり」で、

「ともだち」、「ちょう」、「うぐいす」、「すいーとぴい」、「いけ」、「けむし」、「しろつめぐさ」、「さくら」、「らっこ」、「こいのぼり」という春の情景を表す単語の「しりとり」が配置されている。第4見開きは、「なつのしりとり」であり、第3見開きと同じく「りっくさっく」、「くわがた」、「たいよう」、「うなぎ」、「ぎょうずい」、「いるか」、「かいすいよく」、「くらげ」、「げじげじ」、「じゅうす」という夏の暑い季節を感じさせるように描かれている。第5見開きは、「あきのしりとり」となっており、「すすき」、「きのこ」、「ことり」、「りんご」、「ごぼう」、「うんどうかい」、「いわし」、「しいのみ」、「みかづき」、「きく」というような形で、実りの秋を表現したものが並ぶ。第6見開きは、「ふゆのしりとり」で、「くりすます」、「すけーと」、「としこしそば」、「ばしゃ」、「やまねこ」、「こなゆき」、「きたかぜ」、「ぜんざい」、「いたち」、「ちょこれーと」という冬の風物詩が取り上げられている。こうした「文字」が各見開きに10個ずつ並べられており、それぞれの見開きを締めくくる単語の終わりにある1文字が、次の見開きの始めに来る単語の最初の1文字となる。しかも、冬の終わりにある「ちょこれーと」は、春の始まりとなった「ともだち」に戻っていく。そうした「ことばの円環的面白さ」に基づいた展開は、途絶えることなく巡ってくる四季を象徴するような「しりとり」が形成されているという点で、非常に面白い。

第7見開きから第10見開きまでは、「色のしりとり」が続く。第7見開きは、「あかのしりとり」で、単語は「だるま」、「まぐろ」、「ろうそく」、「くち」、「ちきんらいす」、「すいか」、「かに」、「にんじん」の赤い色のものを集めている。第8見開きは、「しろのしりとり」で、「よっと」、「とうふ」、「ふうとう」、「うさぎ」、「ぎんぎつね」、「ねこやなぎ」、「ぎゅうにゅう」、「うどん」という白い色のものが連なっている。第9見開きは「みどりのしりとり」であり、「ささぶね」、「ねこじゃらし」、「しばふ」、「ふき」、「きゅうり」、「りゅう」、「うきくさ」、「さぼてん」を並べ、緑色のものを集める形である。第10見開きは、「きいろのしりとり」で、「つき」、「きんか」、「かなりや」、「やきいも」、「ももんが」、「がんもどき」、「きみ」、「みかん」というように、黄色いものが取り上げられている。こうした「文字」が各見開きに8個ずつ並べられており、それぞれの見開きを締めくくる単語の終わりにある1文字は「ん」である。各色に彩られたものは無限に存在していることからすれば、その「しりとり」も絶えることなく続くはずではある。しかし、「色のしりとり」という「遊び」を絵本の中の限られたスペースで完結させる意味から、作者は各見開きの終わりを「ん」で締めくくったのであろう。とはいえ、そうした「しりとりあそび」を取り上げた意義は、とても大きいものとして評価できる。

第11見開きは、「全員集合」と呼ぶべきセクションであり、これまでの「しりとり」で登場したもの（キャラクター）が画面に並んでいる。そこには、「文字（単語）」が全く書かれていない。しかし、ここまで「しりとりあそび」を本書でしてきた子どもたちにとっては、それらの「絵」の中に並んでいるものが新たな遊びをしたいと感じさせる誘因になるのではないだろうか。

なお、続く奥付には、著者2人のプロフィールと書誌データが示されている。また、カバー袖に登場していた「しりとり」も中央に描かれ、本書の性格を強調するものになっている。

また、後見返しは、前見返しに描かれていたシルエットの正体を明かしているものである。色は前見返しと同様に全面がオレンジ色で塗られ、そこに同じ配置で10個の絵柄が白く描かれている。また、それぞれの絵には、「**う**ぐいすも**ち**」、「**ち**よ**こ**」、「**こ**こざか**な**」、「**な****し**」、「**し**しいた**け**」、「**け**ー**き**」、「**き**ゅう**い**」、「**い**ち**こ**」、「**こ****ま**」、「**ま**んじゅ**う**」という文字が添えられており、前見

返しと対になって、本書での「しりとりあそび」を象徴する形となった。

さらに、裏表紙（カバーも含む）は、表紙と同じく、画面いっぱいに動物や食べ物などがちりばめられている。第11見開きや後見返しを経て、本書での「しりとりあそび」を終えてのどこか猥雑な余韻が表現されている絵柄と言えそうである。

IV. まとめ — “しりとり絵本” から広がる面白さ

以上、本稿では、石津ちひろの“しりとり絵本”について、「文字」と「絵」の呼応、各見開きのつながりといった点に着目しながら読み解いてきた。最後に、それらを踏まえつつ、石津ちひろの“しりとり絵本”が持つ面白さについて、「ことば遊び」の保育教材という視点から、次の3点を指摘することで、全体のまとめを行いたい。

第1は、第1作『しりとりあいうえお』が、識字だけを目的とした訓練的な「五十音絵本」ではなく、「しりとり」という遊びを積極的に取り入れて構成されている点である。一般的な「五十音絵本」は、「文字」の下に「絵」を単純に配置したものが多く、子どもたちが持つイメージを大切にするという点で十分な配慮がなされているとは言い難い。しかし、本書は、「しりとり」や「だじゃれ」という遊びを通して、「文字」の持つイメージを深めているという意味で注目できる。

幼い子どもたちの目や耳から飛びこんでくる「文字」や「絵」は日常の環境の中で広がっていくため、幼稚園や保育所での言葉の指導において、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」が求められている（改訂『幼稚園教育要領』における領域「言葉」の「内容の取扱い」より）。

本書の第1見開きを例にあげると、「あ」は、いわゆる一般的な「あ」ではなく、「あつひ あしかとあそびたい」という文字表現の方法が採られており、幼児は「文字」の下に描かれている「絵」から「太陽が照り暑いから水を使う」ことをイメージする。そして、そうした印象を基盤としながら、日常生活と同一化していることも注目できるであろう。

しかし、「五十音絵本」として本書をとらえた場合、五味太郎『ことばのえほんあいうえお』（絵本館、1992年）では、「文字」のおもしろさに加えて、「絵」の中に1つの工夫がなされており、そうした点では一歩後退していると言ってよい。すなわち、「あ・ア」を例に取れば、「あくび あざらし あそびにあきた」（傍点原文）という文章の下に、「あしか」が、積み木や輪投げの「あそび」に「あきた」状態で「あくび」をしている様子が描かれているものの、その片隅に「あめ」と「あり」の「絵」も添えられており、「あ」という「文字」で始まる他の言葉への展開がさりげなく行われているのである⁹。「絵」の下に小さな「文字」で示されている「あざらし あめ あり」は、「絵」が持つ表現の豊かさを示唆しているものであって、そうした「絵」の可能性が十分に発揮できていない点では、はたこうしろうによって描かれた『しりとりあいうえお』の「絵」は面白さを欠いていると言えよう。

第2は、第2作『しりとりあそびえほん』が、言葉による「認識」や「概念」の形成という、領域

「環境」に重なる部分へと踏み込んだ遊びを提起している点である。「しりとり」は、単なる言葉だけで楽しむものではなく、身の回りの「もの・こと」との直接的・間接的なふれあいが生かされる遊びであり、こうしたかかわり合いの意義を踏まえながら、本書がその遊びの面白さを絵本の形に表現していることは重要であろう。

幼児は日常生活の中で、ものの性質をとらえたり、数量を比べたりする生活を通して、様々なことを体験している。この体験がより豊かなものとなるように、「ものの大小・色・性質・季節感」などの環境を工夫することが求められる。改訂『幼稚園教育要領』の領域「環境」には、「ねらい」の1つとして、「身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする」ことが掲げられている。また、「身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする」ことも欠かせないという。この視点から見た場合、『しりとりあそびえほん』から生み出される「文字」と「絵」のコラボレーションが、子どもの「環境認識」を深める遊びへと具現化されている点は、高く評価してもよいであろう。

「ことば遊び」とは、そうした意味において、コミュニケーションの道具や自己表現の方法など、言葉の持つ本性から生まれたものであると同時に、「思考力」を高めるための活動としても考えられねばなるまい。例えば、領域「環境」と深く関わる遊びに「仲間集め（マッチング）」があるけれど、この遊びは『『同じ』『ちがう』という基礎的な判断力によって、物と物との関係がより分化し、またことばの意味の理解が深まり、子どものなかにイメージがひろがって』いくという特性が見られる¹⁰。思考活動の過程では、「対象の本質的な特徴をことばで抽象化し、その特徴を一般化する機能」が重要な役目を果たしており、「特に、ことばを獲得してからは、ことばによって概念形成も促進され、概念を定着・操作させる」ことが発達課題だとされる¹¹。このような概念形成には、対象との直接的な体験はもちろんのこと、体験を概念と結びつけるための言葉による橋渡しが必要であり、「なぞなぞ」や「ものの名前（名前カルタ）」などの「言葉遊び」は、子どもたちにとって重要な活動となる¹²。石津が著した『しりとりあそびえほん』における“大小のしりとり”や“四季のしりとり”、“色のしりとり”は、そうした活動に重なる面白さを持つものとして見なくてはなるまい。

第3は、石津ちひろが手がけた他の「ことば遊び」の絵本とも共通することだが、「文字」と「絵」のユーモアあふれるつながりやことばのリズム感を重視している点である。それは、一般的な“しりとり絵本”の絵本にはあまり見られない特徴だと言えよう。

石津ちひろが著したどの絵本にも感じられるのは、「楽しみ、驚きや、イメージを子どもたちにも分かちあってほしい」ということである。特に、「文字」を読みながら、言葉の「リズム」を楽しむ面白さが試みられており、それが「次のページはどんな文字と絵だろう！」という楽しさを引き出している点については、子どもも魅力を感じる点であろう。

「限られた範囲のなかで、言葉と真剣に戯れる」こと、「もしくは、言葉と楽しく格闘する」ことによって紡ぎ出された石津の「言葉遊び」は、それ自体が輝きを持つものである¹³。そうした言葉の魅力について、彼女自身も、あるインタビュー記事の中で自作絵本の「ことば遊び」に触れ、「声を出してコミュニケーションをとるたのしみがある」だけでなく、言葉のリズムによる面白さもあるとして、次のように語っている¹⁴。

「それからことばあそびはリズムがよいので、口にしていると、音楽に浸っているのと同じような気分になれる気がします。子どもには、『心地よい音やリズムに身を浸したい』という本能があるのではないのでしょうか。／〔中略〕／メロディーはついていないけれど、ことばあそびには、音楽に共通する部分がずいぶんあるように思います。わたしの詩を、ラップみたいだと言われたことがあります。そう言われてみると、ラップもメロディーがあるようでないようで、韻をふんでいて……と、ことばあそびに似ていますよね。」¹⁵

石津の『しりとりあいうえお』は、彼女自身も述べているように、軽やかなリズムを刻みながら読み聞かせる「絵本」と考えてよい。全ページに「リズム」をつけて読んでみることは、本書の楽しさを引き出す上では欠かせまい。保育教材という視点から見れば、本書は、保育者が「リズムから文字へ」と子どもに興味を促し、読み聞かせることもできる絵本である。そこから文字付き「リズム」や「身体あそび」へと発展していく可能性も十分含まれている点でも、本書における「言葉遊び」の面白さは広がっていく可能性を持っていると言えよう。

なお、石津ちひろは、本発表で取りあげた2冊の“しりとり絵本”を発表して以降、同じ荒井良二の絵を得た絵本『ハナちゃんとバンビさん』（理論社、2004年）で、物語における謎解きの鍵としてしりとりを取り入れるなど、新たな形式にも挑戦しており、その後の展開を含めた分析が必要であろう¹⁶。また、冒頭でも述べたように、“しりとり絵本”は、石津による作品以外にも、多様な「進化（深化）」を遂げてきている。それらの絵本が持つ魅力や面白さの分析・検討については、他日を期すこととしたい。

-
- 1 「しりとり」という「ことば遊び」の発達上の意義については、高橋登「幼児のことば遊びの発達——“しりとり”を可能にする条件の分析」（『発達心理学研究』第8巻第1号、1997年）などを参照のこと。
 - 2 森岡育子「しりとり」（秋葉英則・神田英雄・才賀敬・勅使千鶴編『幼児のあそび百科（幼児のあそび実践シリーズ5）』労働旬報社、1994年）。
 - 3 拙稿「“しりとり絵本”の面白さ——馬場のぼる作品を中心に」（『児童文学論叢』日本児童文学学会中部支部、第12号、2007年3月）。
 - 4 右田ユミ「一九九〇年代の絵本——問われる『絵本の本質』（鳥越信編『シリーズ・日本の文学史4 はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ——戦後絵本の歩みと展望』ミネルヴァ書房、2002年、p.214）。
 - 5 中川素子・今井良朗・笹本純『絵本の視覚表現』日本エディタースクール出版部、2001年、中川素子『絵本は小さな美術館』平凡社新書、2003年、竹内オサム『絵本の表現』久山社、2002年。
 - 6 〔無署名〕「用語解説」（谷本誠剛・灰谷かり編『絵本をひらく——現代絵本の研究』人文書院、2006年、p.290）。
 - 7 西田良子「ことばの絵本」（鳥越編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ』（前掲、p.321））。
 - 8 これについては、拙稿「“しりとり絵本”の面白さ——馬場のぼる作品を中心に」（『児童文学論叢』日本児童文学学会中部支部、第12号、2007年3月）を参照のこと。
 - 9 五味太郎『ことばのえほん あいうえお』絵本館、1992年、p.2。
 - 10 柚木馥・白崎研司編『保育技術シリーズⅡ／ことばを育てる3——思考力を育てる』コレール社、1987年、p.86。
 - 11 同上、p.8。
 - 12 和田ことみ『子どもといっばい遊ぼう！ことば・表現であそぼ——ごっこあそびから始めよう』明治図書、1998年。
 - 13 石津ちひろ「翻訳家の醍醐味」（『MOE』白泉社、第16巻第5号通巻178号、1994年8月、p.58）。

- 14 〔無署名〕「COOYON絵本箱／『ことばあそびの絵本』は、しゃべる音楽だったのですね、石津ちひろさん。」（『月刊クーヨン』クレヨンハウス総合文化研究所、第91号、2003年10月、p.11）。
- 15 同上。
- 16 同書の魅力については、原あゆみ「石津ちひろ作、荒井良二絵『ハナちゃんとバンビさん』——新しい、『物語と言葉』の関係」（『白百合児童文化』第14号、2005年）などを参照のこと。

※ 本稿は、日本乳幼児教育学会第17回研究大会（2007（平成19）年8月19日、於・東京学芸大学）における同題の口頭発表用レジュメを加筆・修正したものである。